校友時報

昭和40年7月9日
編集人兼発行所
秋田県能代市畠町追分2
秋田県立能代高等学校新聞部
印刷所　大勝堂印刷所

好評のうちに幕

―第六回能高祭―

生徒待望の第六回能高祭は九月二十一、二十二、二十三日の三日間の日程で開催された。今年は創立四十周年にあたっており、能高祭実行委員会を初め各文化クラブ共一学期から計画、準備を進めてきた。その結果、前夜祭のフォークダンス、演芸会、ステレオコンサート等の催し物、ルームデコレーションとほぼ例年どおりの内容であった。しかし創立四十周年の為、学生、同窓生、父兄等多くの来校者で会場は賑わった。

第六回能高祭は九月二十一日前夜祭、二十二、二十三日に本祭と三日間にわたって開催された。今年は創立四十周年にあたっており安井生徒会長は四十周年記念祭は盛大に行うとの公約をはたすべくこの行事に力を注いだ。

前夜祭に行なわれるフォークダンスの為に棚橋舞踊研究所の棚橋晴生氏を迎え十三、十五、十七、二十日の四日間練習を積んだ。また市内行進が計画されたが生徒の反対の為取りやめとなった。それで二十一、二十二日には市内に宣伝カーを繰り出しPRにつとめた。二十一日は式典の予行演習があった後、三時よりギター演奏会が開かれ文化祭の気分を盛り上げていった。夕方からはマイムマイム、オクラホマミクサーなどの曲に合せてフォークダンスが行なわれた。学校の周囲は去年より三十本も多い八十本の田楽で飾られ、二つのファイアーストームを囲んだフォークダンスの輪は六時には六百人ほどだったのが途中で千五百人近くにふくれ上がった。輪も二つから三つとなりここで前夜祭は最高潮に達し上々の成果を納めた。また校内では本祭の準備が進められ、装飾係は前庭にトーテムポールを二本立てたほか、ツタンカーメン王を形どった高さ三メートルほどの門を作った。

二十二日は九時より創立四十周年記念式典があり学校長の式辞、県教育委員会以下四人の方々より祝辞がのべられた後永年勤続者表彰学校主催の音楽会が開かれた。午後からは待望の喫茶の店開きがあり二時からは一Bと一Cの教室でステレオコンサートが、三時からは「まだ名もない本」の主催で討論会が開かれた。討論会は人気を呼び会場の一Aは学生でいっぱいになり活発に意見が出されていたこれと並行して展示会も行なわれJRCの血液型の判定、化学班のケミカルガーデン作り、物理班のアマチュア無線などが人気を集めた。また六時からは父兄を対象とした音楽会と演劇会があり音楽会はクラッシックギター演奏、合唱、エレクトーン他の独奏、合奏、ブラスバンド、エレキギター演奏が行われた。演劇は後藤茂演出による「海底の六人」が行なわれ好評を博した。

二十三日は秋分の日ともあって来校者は五千人を数え最高の人出となった。体育館ではもうおなじみとなったエレキギターの演奏、音楽会演劇会が行なわれた他、JRC主催の体操場でのフォークダンス、一B、一Cでのステレオコンサート、あまり人ははいらなかったが図書館二階では旅行研究会による「ユースホステルの旅」の映写会が行なわれた。午後四時、展示物がはずされこれがグランドに運び出され火を放たれた。火は借しげもなく展示物をなめつくし、その回りでは最後の慰労フォークダンスが行なわれ七時に能高祭バンザイの声とともにその幕を閉じた。

論説

「話し合いの場を持とう」

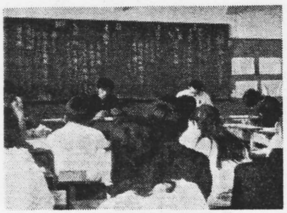
文化祭第一日の九月二十二日、「まだ名もない本」の会主催の、討論会「戦後世代の反省と展望」が開かれた。本校で討論会が開かれるのは年に一、二度というくらい、まれな事である。特に今回は文化祭で講演会が開かれなかった為、生徒の考える唯一の場として期待されていた。

ともかく会場の一年A組には満員の参加者を迎え討論会は始まった。初めのテーマは「戦後世代を解剖する」で、モンキーダンスの流行等について話し合われた。その後「義理、人情について」、「戦争と平和について」と変わり、討論は更に続けられた。

この会を主催した「まだ名もない本の会」は、今春三年生有志によって結成されたものである。その主旨は、自分達の周囲にある、いろいろの問題について考え、語り合おうというものだそうである。

彼らがその活動の範囲を広げ、多くの生徒の話し合いの場を作った事は感謝に値する。

しかし期待を集めて開かれた会は十分その目的を達したとはいえなかった。討論が正常に進められたのは初めのテーマ「戦後世代を解剖する」のみで、その後議論が混乱した。その為数々の動議がだされ、テーマを変える等、色々試みられたが、結局事態の収拾はできず少数の者の意見がかわされるのみとなった。



一Aでの討論会風景

主催者「まだ名もない本」の会の反省録には数々の原因が述べられている。だがその中で最も大きな原因は、参加者の話し合いの態度であると思う。会の中頃から売名的な発言、破壊的な発言、煩雑な他人に判りにくい内容の発言がしばしばあった。それ以上に他人の意見をよく聞くという討論の根本的態度が疑われることさえあった。

これは個々の考える事、話し合う事の経験の少なさからくるものと思う。本校に於いては前述の通り、討論会の開かれる機会は少なく、またクラスの話し合いの場たるH・Rも満足に運営されておらない状態である。

しかし、今回の討論会に多数の参加者があったという事は生徒個人の思考と討論に対する飢えを表わしている。各々が他人と話し合う機会を望みながら、その機会に遭遇すれば、討論ができないという事は、全く嘆かわしいかぎりである。我々にはもっと互いに話し合う事、考え合う事が必要なのである。

ところで最近あるクラスで現在のH・Rをどうすべきかについて放課後デスカッションがあった。自習をするH・R、先生の〃お話〃を聞くH・R、果たしてこれがH・Rの姿であろうか。H・Rの運営について真険に討議された。その結果、クラスの問題、生徒会の問題、我々をとりまく諸問題について考え話し合うべきだ、という結論に達した。そして更にそれを実行に移すべく討議がなされた。

これは我が校にとってよい傾向である。いや生徒各々の思考と討論の飢えからくる必然性なのである。我々は大学入試という壁に圧され沈滞したムードに浸っていてはならない。我々が考えなければならぬ問題は限りない。まず自分の考えている事を他人と話し合う事から始めなくてはならない。

会長に伊東恭悟君

後期役員選挙終る

昭和四十年度後期生徒会長、副会長の選挙は十月十一日、十二日の両日投票が行なわれ会長に伊東恭悟君（二C）副会長に大塚健三君（一B）が当選した。

今回の選挙は九月二十八日告示され十月二日締め切りとなっていたが一人の立候補者もなく六日までのばされた。そして六日会長に伊東君、大久保君、副会長に大塚君が立候補を届け出た。翌日から選挙戦にはいり、各候補者は各クラスを回り投票をたのんだ。投票日の十一日五時限に全校生徒を体育館に集め、十里強歩の表彰式のあと立会演説、応援演説を行なった。そして各ホーム・ルームに帰って投票にうつった。選挙管理委員から投票用紙が配られ各生徒はそれぞれ候補者に投票した。放課後選挙管理委員会の手で開票が進められた。開票の結果副会長候補は信任と決まったが会長は第一位の伊東君の得票数が総投票数の過半数に満たなかったため〃生徒会正副会長選挙に関する規則〃第十二条一項により翌十二日再び投票が行なわれることになった。十二日は昼休みに投票が行なわれ放課後開票の結果伊東君が五六六票を獲得して見事当選した。その結果は次の通り。

▼生徒会長

当選伊東恭悟（二C）　五六六票
次点大久保博司（二B）三八二票
総投票数　一〇八五票
無効　一三三票
棄権　六四票

▼副会長

大塚健三（一B）
総投票数　一〇三二票
信任　五一四票
不信任　三八五票
無効棄権　一八三票

十一日の結果

伊東　恭悟　五〇〇票
大久保博司　三九五票
総投票数　一〇三二票
無効　一三八票
棄権　一一七票

なお全校生徒数は一一四九人

このように新しい生徒会長、副会長が決まったわけだが創立四十周年の後半を立派に締めくくるためにも、来年度への基礎を築くためにもこの二人を中心として全校生徒が一丸となって生徒会活動を盛り上げ、生徒会不振の汚名を返上するよう努力することを期待したい。

アルバム委発足

九月十三日（月）午後三時から視聴覚教室において卒業アルバム委員会の初会合が開かれた。最初各学級で話し合った意見を出してもらい、続いて学年としてのまとめに入った。おもな意見は次のようなものである。アルバム作成には大部分が賛成であり、全員が買うようにしたい。三千円以下で編集してほしい。内容は学級写真と、全学年的写真（各教科の先生、クラブなどを含む）を半々にし変化のあるものにしてほしい等々。しかし単価やその他の関係ではっきりした作成の方針はいまだ未決定で、予算（積立貯金などのことも含む）や個性を生かす学級写真など具体的なことは第二回のアルバム委員会で話し合う予定。なお第二回は十一月十日頃、修学旅行が終つてから開くことに決まった。

時評

人間尊重

高木洪爾

このあいだカシミール問題をとりあげたテレビを見た。紛争の歴史的背景や両国の様子、そして戦闘場面を生々しく伝えていた。

両国民は、インドでもパキスタンでもお互いに相手を激しく非難し、寺院で勝利を祈っていた。また新聞やラジオは連日勝利を報道していた。だが戦災に遇い家財道具を頭上に載せて逃げ惑う人々の姿をもカメラははっきりと捉えていた。

これを見ているうちに苦いおかしみが込み上げてきた。近代兵器で闘っていながら一方では戦勝を祈願し、そして同じようにどちらも戦勝のニュースで沸き立っている。しかも共に「正義」を振りかざして相手を非難している。

近代は人間尊重という点で中世と時代的に区別されるというだが人々を戦場にさまよわせるのが近代なのだろうか。主義主張のために武器を手にしたり、気にくわない相手を武力で抑えつけることが人間尊重なのだろうか。

人間は生物学的には動物であるが他の動物との間には一線がひかれている。この一線にこそ人間をして人間たらしめている価値があるはずである。人間尊重とはこの価値を自覚することに他ならない。そして今日ほど人間の価値に対する自覚を要求されている時はない。

「神」のために殺しあう時代はすぎたのだ。しかし今日神の座には正義や主義が取って替った。そして人間は新たな「神」のために武器を手にしている。主義主張が異なる故に闘う人間と、敵には牙をむき出す動物との間に自信をもって確たる一線をひくことができるだろうか。

他の人格を認め尊重することは、ひいて自己の人格の自覚と尊重につながる。否、人格とは他の人格を尊重することによってはじめて確立するのである。

我々はもう一度「人間尊重」の意味をじっくり考えてみる必要があるのではないだろうか。

（国語担当）

部員募集
能代高校新聞部

学生のみせ
キムラヤ
はたまち　2－5535

風味豊かな
パン
お菓子
エーワン
大町
T 2－2343

金物をハント
能久金物店
万町　T 2－5344

山田のパン
T 2－6374

大越薬局
疲労回復に
ヒツト
エース錠
エアー
サロンパス
柳町　T 2－5016

柳町
スポーツの秋・スポーツの秋
能代スポーツ
TEL 2－4613

D.P.E
カメラ
佐藤写真館
パチリ
大町　T 2－2433